

ハイドン：《天地創造》 第2部 より 第22曲 「今や天はこの上なく輝き」

1796～98年に作曲され、1799年に公開初演されたハイドンのオラトリオ《天地創造》は、3部構成になっており、第1部では天地創造の1日目～4日目が、第2部では5、6日目が、そして第3部では7日目のアダムとイブの様子が描かれる。第2部（6日目）・第22曲「今や天はこの上なく輝き」では、大天使の一人ラファエルが、動物たちのなかに人間が欠けていることを歌う。

チャイコフスキー：歌劇 《エフゲニー・オネーギン》 より

1879年に初演された歌劇《エフゲニー・オネーギン》は、プーシキンの小説をもとにしたチャイコフスキーの歌劇の代表作。「ポロネーズ」は、その第3幕冒頭で奏される堂々とした華やかさをもつ音楽で、オネーギンとタチアーナが再会を果たすグレーミン公爵家での宴の幕が開く。「恋は年齢を問わぬもの」は、同じく第3幕でグレーミン公爵が愛妻への思いを歌うアリア。その夫人こそ、かつてオネーギンが恋心を寄せられたタチアーナだった。

R. シュトラウス：歌劇 《エレクトラ》 より 「ひとりだ！ なんと悲しいこと」

1909年に初演された歌劇《エレクトラ》は、R. シュトラウスが作家ホフマンスタールと初めてタッグを組んだ作品。ギリシャ悲劇に材を採り、アガ멤ノン亡き後の王宮に巻き起こる復讐劇を描く。「ひとりだ！ なんと悲しいこと」では、アガ멤ノンの娘エレクトラが亡父を追慕する。

ワーグナー：楽劇 《神々の黄昏》 第1幕 より 「私の言うことをよく聞いてください！」

完成までに20年以上を要した『ニーベルングの指環』は1876年、第1回バイロイト音楽祭で全4部作が初演された。その最終日に上演されるのが、楽劇《神々の黄昏》。「私の言うことをよく聞いてください！」は、第1幕第3場で、ヴァルトラウテがブリュンヒルデのもとを訪れ、神々の窮地を救うために指環を返すよう迫る。

ヴェルディ：歌劇 《オテロ》 第2幕 より オテロとイアーゴの二重唱 「神にかけて誓う」

シェイクスピアを敬慕していたヴェルディは、その全作品のオペラ化を考えていたという。シェイクスピア原作の歌劇《オテロ》は、1887年にミラノ・スカラ座で初演された。「神にかけて誓う」は、第2幕終わり、イアーゴの策略にはまったオテロが自分を裏切った妻に復讐を誓うシーンにおける、オテロとイアーゴの二重唱。

ワーグナーの作品より

1868年初演の楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、ワーグナー唯一の喜劇。その「第1幕への前奏曲」は、単独で演奏されることも多い作品。物語を凝縮したように、主要動機が対位的に絡み合いながら展開する。1843年に初演された歌劇《さまよえるオランダ人》は、永遠の愛を求めて海をさまよう幽霊船の船長（オランダ人）の物語。「我が子よ、いらっしゃいをお言い」は、その第2幕第3場で、自宅に招いたオランダ人を、娘ゼンタに引き合わせるダーラントのアリア。歌劇《タンホイザー》は1845年の初演。「おごそかなこの広間よ」は、その第2幕第1場で、歌合戦が催されるヴァルトブルク城においてエリーザベトが歌う「歌の殿堂」のアリア。1850年に初演された歌劇《ローエングリン》は、聖杯騎士ローエングリンとブラバント公国の公女エルザの物語。「はるかな国に」は、第3幕第3場において、いよいよローエングリンが自らの身元を明かし、グラール（聖杯）の聖なる力について語る場面のアリア。1882年に初演された舞台神聖祝典劇《パルジファル》も、聖杯を守護する騎士団にまつわる物語。その第3幕で、「その通り！ ああ！ 哀しくもつらいこの身」と苦悩の極致にある王アムフォルトスは、死を請い願う。しかしその後、王の傷はパルジファルによって癒やされる。楽劇《ワルキューレ》は、『ニーベルングの指環』の第2作。『指環』の完成を待ちきれないバイエルン国王ルートヴィヒ2世の命により（《ラインの黄金》に続いて）1870年に単独初演された。その第2幕第1場の「それならば、永遠の神々はもうお仕舞なのですか」では、フリッカが、勝利の代わりにジークムントに死を与えよ、とヴォータンに迫る。《ワルキューレ》第1幕第3場で歌われる「寝ているのですか？ 客人よ」～「ジークムント、ヴェルゼの子よ！」では、ジークリンデが自身の身の上を語るうちに、彼女とジークムントが生き別れた兄妹であることがわかり、ジークムントも名乗りを上げて、互いの深い愛情を吐露する。